

文化財保存活用地域計画と 日本遺産

1 文化財保存活用 地域計画について

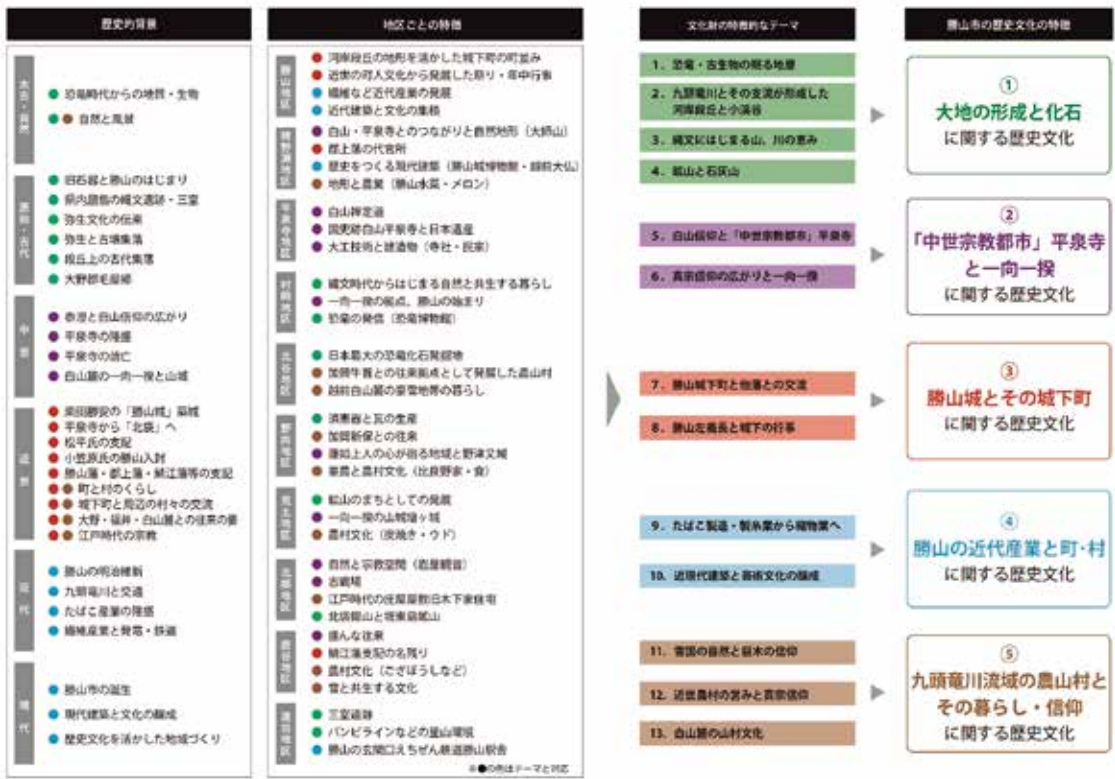
わたしたちは、先人たちの歩みと密接なつながりを持ちながら現在を生きています。その歩みは確実にわたしたちやわたしたちの子孫が生きるであろう未来に途切れることなくつながっていきます。過去を知ること、先人たちに学ぶことは、わたしたちが未来へどのような歩み方をするのかを考えることにほかなりません。

文化財は、先人たちやわたしたちがこれまで身につけてきた知識や技術、地域社会などの歩みをよみがえらせてくれます。わたしたちは、はるか昔から育まれ続けてきたこのような「歩み」を未来へ伝えていく責任を持っています。そして、それを市内外の人びとにも広く伝えていかなければなりません。

また、文化財を通して地域の歴史文化を読み解くことで現れる地域のおもしろさや重要性を知ることができます。これは、地域の特徴を理解することや地域社会の活性化にもつながります。

このような文化財を保存・活用していくためには、各文化財の所有者や管理者だけでなく、市全体で推進することが必要です。また、民間事業者をはじめ、さまざまな関係者や団体と協働体制を構築し、それぞれのノウハウを持ち寄って、多様な手法で保存・活用を行っていくことが望まれます。

この計画の作成を契機として、文化財の保存・活用に対する意識を高め、住民参加の裾野を広げていくことが大切になっていくことでしょう。



2 日本遺産について



「日本遺産 (Japan Heritage)」は、地域の歴史的な魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。

勝山市では、平泉寺と勝山城下町が「400年の歴史の扉を開ける旅～石から読み解く中世・近世のまちづくり 越前・福井～」のストーリーで、令和元年（2019）に日本遺産の認定を受け、文化財の保存だけでなく、積極的な活用が図られています。また、この日本遺産は、福井市と勝山市の複数の自治体にまたがってストーリーが展開して認定されています。

《ストーリーの概要》

越前・福井には、中世に大量の石を用いて計画的につくられた2つの都市が誕生し、今も独特の空間を醸し出しています。また、近世の福

井城下町は、風景に溶け込む美しい青色の笏谷石が天候によって町並みの色合いを変化させ、勝山城下町では、自然の力がつくった階段状の地形を活かす町に石の壁が断続的に続いています。

さまざまな形に姿を変えて時代を越えてきた石が私たちを出迎える越前・福井は、日本人と石との共生の歴史や屈指の石づくり文化を体感させてくれる地です。

■石づくりの中世宗教都市と戦国城下町

古くから北陸道諸国の都からの入口であった越前。中世には大きな二つの「都市」、白山平泉寺と一乗谷が生まれました。平泉寺は、全国的にもいち早く多くの石を使って計画的な「都市」をつくりあげ、越前で石を使ったまちづくりのルーツとなりました。その技術は一乗谷へと受け継がれていきます。

〔勝山市内の構成文化財〕

白山平泉寺旧境内（国史跡）、中宮白山平泉寺境内図、安波賀街道、九頭竜川、白山平泉寺出土品

■近世城下町のまちづくりと石

一乗谷と平泉寺が滅びた後、石に関する技術は、新たに築かれる近世の城郭と城下町へと受け継がれていきます。福井城とその城下には、「笏谷石」が大量に用いられました。勝山城とその城下町では、武家地と町人地をわける南北方向の高さ5～7mの河岸段丘崖「七里壁」に川石を使った石垣が徐々に築かれるようになりました。

〔勝山市内の構成文化財〕

七里壁（市史跡）、旧勝山城下の街並み景観、大清水

■石に現れた日本人の美と信仰

石は美の表現や信仰の対象にも活かされました。中世の平泉寺や一乗谷につくられた石を使う庭園や、笏谷石製の石仏・石塔は、当時の人びとの美意識や精神文化、祈りの心などにふれることができます。また、神社には美しい造形の狛犬を数多く見ることができます。

〔勝山市内の構成文化財〕

旧玄成院庭園（国名勝）、白山平泉寺の石造物

【わたしたち歴史探検隊】 地域の歴史を調べてみよう

◆はたや記念館『ゆめおーれ勝山』を訪ねて

勝山のせんい産業の発展を探る

はたや記念館「ゆめおーれ勝山」は、明治38年（1905）から平成10年（1998）まで、勝山の中堅機業場として操業していた建物を、保存・活用した施設です。市内の現存する木造の機業場の中ではもっとも古く、平成18年に勝山市有形文化財に指定され、翌年には経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。わたしたち歴史探検隊は、この記念館を訪ね、なぜ、勝山市が「せんいの町」といわれるほど、せんい工業がさかんになったのか調べようと思いました。



①『ゆめおーれ勝山』を見学しよう

『ゆめおーれ勝山』では、機屋に関する歴史やそこで働いていた織子さんの生活のようすについて見学しました。機屋で使われていた織機や糸繰機、整経機が展示されており、勝山の典型的な「機屋」の姿が残されていました。



【物知りメモ】博物館の見学

- 見学に行く前に、博物館の概要や開館時間などを調べ、予約が必要な場合は必ず予約をしておこう。
- 博物館の方の話を聞きたいときは、前もって連絡しておこう。
- 説明や展示されているものについて疑問をもったことや、わからないことがあったら、職員の方などに質問してみよう。
- 展示物はできるだけ細かく観察しよう。

↑歴史ギャラリー

機屋に関する歴史をわかりやすく紹介しているね。

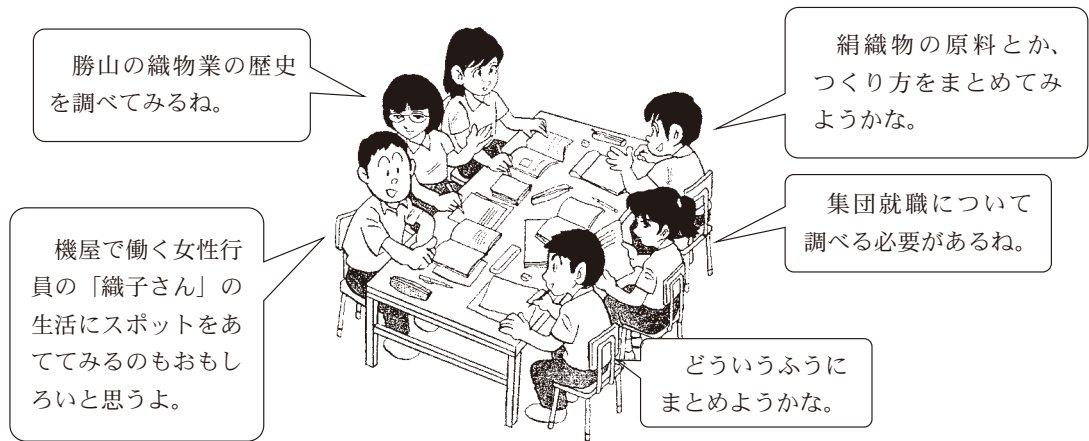
糸繰機→

機屋で動いている機械を
目や耳で体感することができたよ。



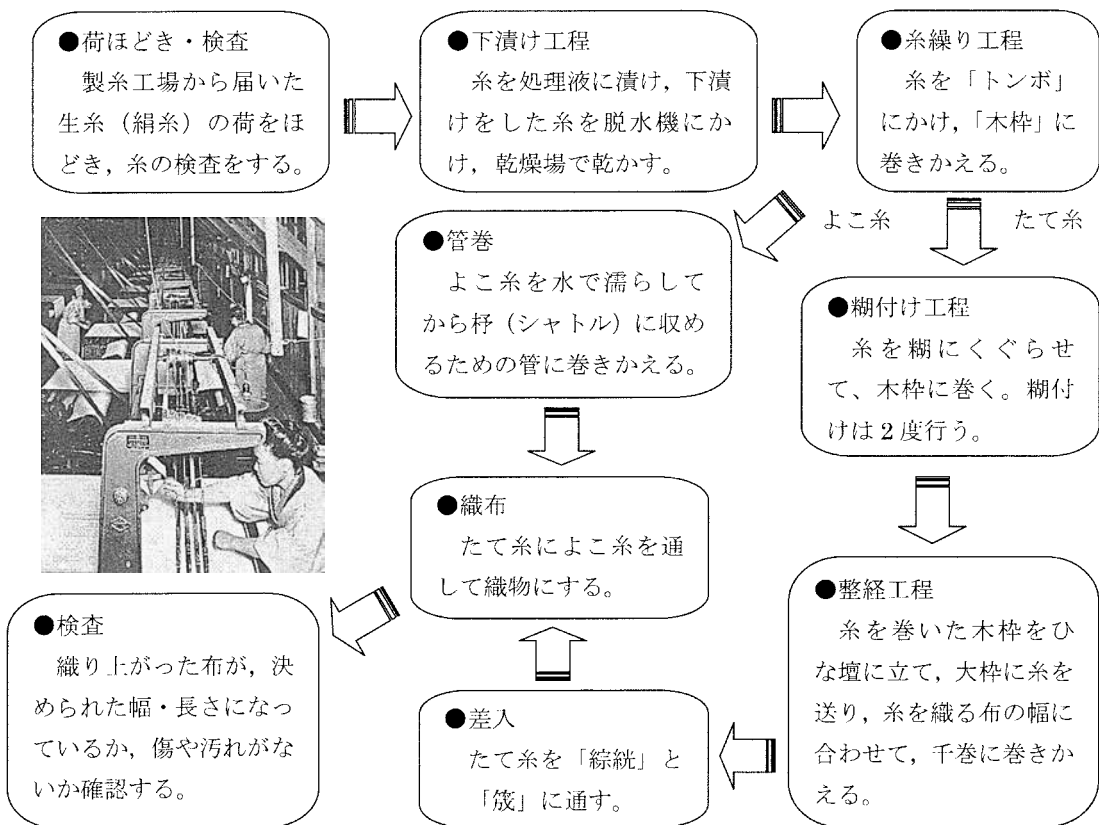
② 見学して疑問に思ったことを話し合おう

『ゆめおーれ勝山』を訪ねた歴史探検隊のメンバーは、勝山市で織物業が本格的にはじまったのは明治時代の中ごろだったことを知りました。そこで、見学したことをもとに話し合い、いくつかのテーマに分けて、調べることにしました。



③ 調べてわかったことをまとめよう

<テーマ1> 絹織物「羽二重」はどのようにつくられるのだろうか。



<テーマ2> 勝山の織物業は、どのように発展してきたのだろうか。

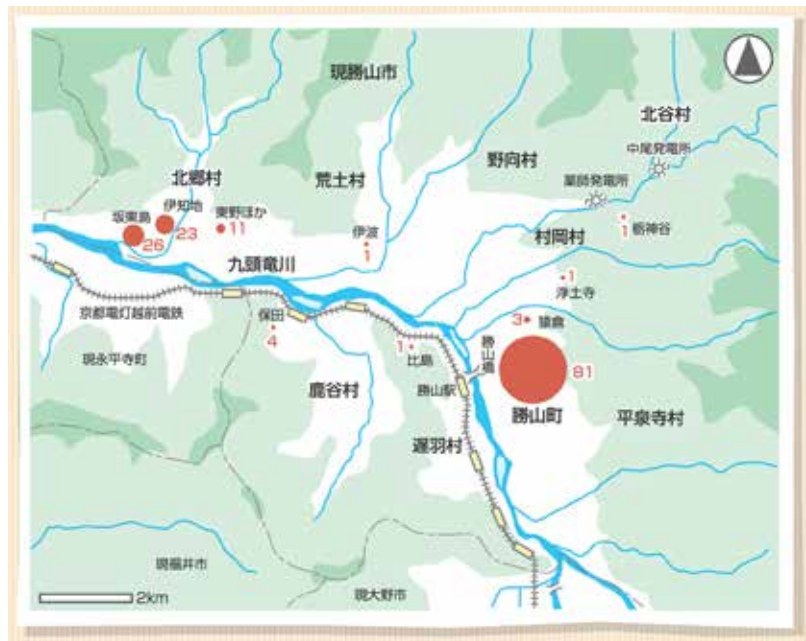
勝山では幕末から明治時代にかけて、たばこや生糸の生産がさかんでした。しかし、生糸は他の先進的な産地に押されて生産が落ち込み、たばこは明治30年（1897～）代に専売制になったため、多くの生糸やたばこ業者が織物業へと転換していきました。

【勝山の織物業の発展】

- 明治7年（1874） 袋田町岸ノ下に製糸工場が建てられ操業を始める。
- 明治9年（1876） 勝山製糸会社が創立される。
- 明治15年（1882） バッタン機による機織りがはじまる。
- 明治23年（1890） 白木治右衛門が機業を始める。
- 明治40年（1907） 山岸伊之助が山岸機業場を創設。
- 明治41年（1908） 京都電灯株式会社が北谷村中尾に発電所を建設。
力織機運転に電力が使用されるようになる。
- 明治43年（1910） 勝山兄弟合資会社発足。
- 明治45年（1912） 県下に先駆け勝山織物組合ができる。
- 大正3年（1914） 福井～勝山間に電車（京都電灯）が開通し、織物製品の運送力が向上する。
- 昭和9年（1934） 人絹織物業が最盛期を迎える。

勝山地域の機屋の数（1936年ごろ）

※数字は機屋の数

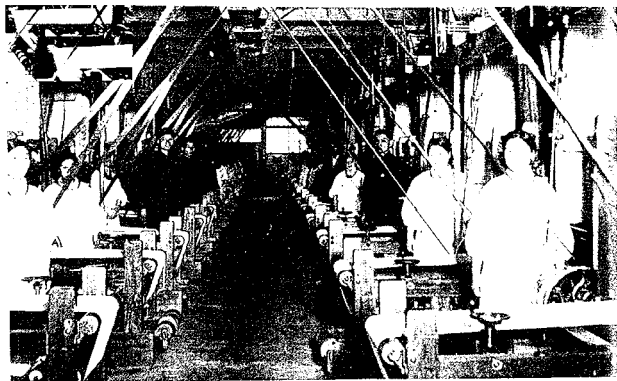


（『勝山市史』3巻を参照に作成）

- 太平洋戦争中（1941年～） 一部の機屋では、軍需用として落下傘の生地を織るようになる。
- 戦後の復興期（1950年～） 「ガチャマン」景気（織機が1回動くと、1万円もうかる）を迎える。
- 高度経済成長期（1959年～） 県外からの集団就職者の受け入れを始める。

<テーマ3> 機屋で働く「織子さん」は、どのような生活をしていただろう。

「織子さん」とは、機屋で働く女性工員のことです。ほとんどが近くの農家から働きに来ており、大半が10代後半から20代の若い人たちです。寮に入る人もたくさんいて、寮では「夜間青年学校」が開かれました。



● 織子さんの1日のスケジュール（寮生活）

織子さんの一日	
5:00	起床
5:30～5:45	朝食
6:30～12:00	仕事
12:00～12:15	昼食
13:00～17:30	仕事

昭和10年（1935）ごろ

● みんなで食事をしているところ



ある日のメニュー（寮生活）

朝	タクアン わかめの味噌汁
昼	タクアン キャベツ きゅうりと油揚げの味噌汁
晩	タクアン 牛肉、玉ねぎ、じゃがいもの煮付け

くわしく知りたいときは…

勝山の歴史や織物産業などについてまとめた書籍で調べてみましょう。



「ものがたり かつやまの歴史」
上・中・下



「はたやブックレット」1～11

ほかにも色々な本があるので、図書室や図書館などでさがしてみよう！

④ 自分の調査カードを作ろう

調 査 カ ー ド

年 月 日

訪問先	年 組	名前
-----	-----	----

住所	電話
訪問の目的	

訪問して

①いつごろのこと(もの)か	④職員の方への質問と答え
②わかったこと, 考えたこと	
	⑤欲しい資料
③おもしろかったこと, 疑問に思ったこと	⑥スケッチ&メモコーナー